はじめに

２０２１年夏、小山田圭吾氏が東京オリンピック・パラリンピック開会式の楽曲制作担当に名を連ねていることが発表されました。東京五輪開催への賛否を別として言えば、同氏の国際的な活躍とその音楽性の高い評価からして、これほど妥当な起用はありません。ところがわずか数日後には辞任を余儀なくされてしまう。学校時代のいじめをめぐる１９９０年代の雑誌上での発言がＳＮＳで「炎上」し、それが内外の有力メディアで報じられ国際スキャンダルの様相を呈するに至ったことが原因です。辞任表明直後の『報道ステーション』（朝日テレビ）で、アナウンサーは「いじめというよりは、もう犯罪に近い」とまで発言しました。

２０２２年夏、その小山田氏は、騒動直後の前回には出演辞退を余儀なくされたフジロックフェスティバル、そして同フェスと並び夏の２大フェスと称されるサマーソニックの前夜祭ソニックマニアに、長年のソロプロジェクトである「コーネリアス」名義で相次いで出演、音楽ファンのあいだに復活を印象付けました。放送開始以来10年にわたり楽曲を

担当してきたＮＨＫ Ｅテレの人気番組『デザインあ』こそ今なお休止状態にあり、その創意に満ちた音楽と映像に触れる機会を奪われた多くの子どもたちと大人たちを悲しませているとはいえ、当初の騒動の大きさを思えば、同氏は順調な活動再開を果たしつつあると言えるかもしれません。

比較的短い自粛期間を経て活動再開できた理由のひとつは、本件には報道被害の側面が大きく、大炎上に見合うだけの事実はなかったということが、少なくとも関心層にはおおむね周知されたためでしょう。

小山田氏自身は、２０２１年９月に誠実かつ勇気ある「いじめに関するインタビュー記事についてのお詫びと経緯説明」（以下「お詫びと経緯説明」）を発表しました。そしてまた、場合によっては後付けの言い訳とも受け取られかねないこうした弁明を孤立させず、正当に受け入れられるような環境づくりに貢献したファンたちの奮闘を忘れるわけにはいきません。炎上直後からブログやＳＮＳを通してファクトチェックを推し進めた、女性を中心とするファンたちの努力がなかったら、状況は今とは異なったものになっていたかもしれないのです。この点については、２大フェス出演を機にわたしが公表したネット記事を御覧ください（「炎上騒動を超えて―小山田圭吾、活動再開の背景にあった女性ファンの『集合的知

性』」集英社オンライン、２０２２年9月23日）。

とはいえ、本人とファンによるこうした情報修正は大きな意味を持ったにしても、２０２１年夏の過熱した報道によってほとんど国民規模で広まった誤認識を同じ規模で正すことは、残念ながらできていません。本書は第一に、出版により世論を喚起することで、正確な認識を少しでも広めたいという意図から企画されています。

しかし本書の狙いは、それにとどまるものではありません。

＊

本書は、国際的に活躍しその音楽性を高く評価されてきたミュージシャン、小山田圭吾氏をめぐり２０２１年夏に沸き起こった騒動の背景を探索することを通して、わたしたちが生きる社会の数々の難事を浮き彫りにする試みです。わたしはこの本を、幅広い読者を想定して書きました。

小山田氏の音楽と人に関心を抱くすべての人びとに届けたいのはもちろんですが、それだけではありません。今日のメディア環境下で促進される誤情報や偽情報の大規模な拡散

――新型コロナウイルス感染症のような「パンデミック」との類推から「インフォデミック」と呼ばれる――を憂慮する人びとに、その典型的な一事例を詳細に提供するのも目的のひとつです。

本書はまた、１９９０年代およびそれ以降の文化を新たな視点から捉えなおす取り組みの成果でもあります。とりわけ、男性中心の音楽ジャーナリズムの問題性を歴史的に振り返ることで、ポピュラー音楽を語る女性たちの声を復権させる一助となればという思いは、小山田氏をめぐる騒動を収拾するために発揮された女性ファンダムの力強さと創意工夫を前にして、執筆を促す大きな動機となりました。

さらに本書は、わたしたちの社会を悩ませることをやめない「いじめ」という難問に対する建設的な問題提起として書かれてもいます。

小山田氏は、90年代の音楽ジャーナリズムによって発言の一部を誇張的に歪曲されたのち、21世紀になってあるブログ記事の恣意的な引用の犠牲になるに及んで、自慰と食糞を強要し、知的障害者を性的に虐待して楽しむ生徒だったという、すべてが事実に反する禍々しい人物像を広められることになりました。まずはこの偽情報を正さなければならないのは、言うまでもありません。

しかし悩ましいのは、報じられた事柄の事実性が否定されたことを知ったうえでなお、今回の大騒動を不当な「インフォデミック」として問題視するよりも、元「いじめっ子」としての小山田氏の責任を問うことを重視すべきだという感覚が、わたしたちの社会においては正当なものとして許容されているように見える、ということです。

本書の著者であるわたしもまた、社会の一員として、こうした感覚は理解できなくもありません。教育社会学者の伊藤茂樹氏は、今日の日本では、いじめ自殺やそうした帰結を導きかねないいじめ加害は、直接の当事者の問題を超え、社会全体が共有する「集合感情」（デュルケーム）を侵害する行為の典型となっていると論じています（『子どもの自殺」の社会学―「いじめ自殺」はどう語られてきたのか』青土社、２０１４年、第１章）。だからこそわたしたちは、赤の他人のいじめ被害を知らされても、わがことのように憤慨せざるをえないのです。

問題は、侵害された集合感情を回復するための社会的反応が、しばしばいじめと相似的な、不当な非難と攻撃に道を開いてしまうことです。小山田氏の一件に限った話ではありません。いじめやそれに類する事象を憎む思い自体はまったく正当であっても、そうした思いに促された世論の沸騰は、必ずしも学校生活や社会生活をよりよいものにはできてい

ない。こうした困難を痛感している人びとに近年の教育社会学の知見の一端を紹介し、思索と実践の糧をもたらすことができたらという願いもまた、本書を出版する大きなきっかけとなっています。

*

けれども、すべての出発点にあるのはあくまで、コーネリアスこと小山田圭吾氏の音楽と人をめぐる考察にほかなりません。

大炎上の年の秋、本書の元になった原稿を準備する過程で、わたしを大いに励ましてくれた文章があります。作家の古谷田奈月氏は、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』をめぐるある文芸誌の特集の枠内で、小山田氏および小林賢太郎氏――劣らず問題含みの告発を受けて、東京オリンピック・パラリンピックの開閉会式のショーディレクターを解任された――を取り上げました。そこでプルーストの大長編のうちに、良くも悪くも過去を「更新」していく「時」の作用が主題化されているのを読み取った古谷田氏は、そうした更新または「恩赦」ののち、やがて小山田氏と小林氏の作品が、生前の騒動とはほ

とんど無関係に享受されることになる未来を想(おも)い描いています。

小山田圭吾の音楽や小林賢太郎の芸に今から何十年もあとに、彼らが死者となり、生前の不祥事などたとえ知っても生々しくもなく、さほど興味も持てず、ただ作品だけが確かな「現在」の事実として目の前にある、そういうふうに触れる人がきっと現れるだろうと考えている。

それを希望と呼ぶつもりはない。絶望と呼ぶつもりもないように。ただ作品を完全に殺すことは、社会的にであれ生物学的にであれ、人を殺すことよりずっと難しいというだけのことだ——果てしない「時」のなかでは。

（「罪のような寛容さ」、「文學界」２０２１年10月号）

作品の持つ力へのこうした信念を、本書の著者であるわたしは古谷田氏と共有しています。小山田氏が騒動を乗り越えることができず、新たな創作が途絶えてしまった場合でさえ、彼が残した音楽は、おそらく22世紀になっても、惑星の至るところで、さらには地球の外においても、新たな耳を喜ばせ続けることができたに違いありません。

しかし本書は、作品の未来をめぐるそのような信念に支えられながらも、現在と近い将来における小山田圭吾という人間の尊厳の回復を祈って書かれています。これはひとつには、作品のためを思ってのことです。まだ50代前半の小山田氏は、これまで構築してきたすでに比類ない音楽世界をさらに豊かなものにしていけるはずであり、そのためには、社会的生命の回復が必須の条件となるのですから。

けれどもまた、というよりもいっそう、わたしが気にかけているのは人間のことです。まずは、『デザインあ』の仕事に代表されるように、取り立てて音楽に通じているわけでもない子どもたちと大人たちを含めたあらゆる人びとの日常に心地よい驚きをもたらす仕事に喜びをもって取り組んできた小山田圭吾という人間が、不当な評価から解放されてほしいという思いがある。しかしそれだけではありません。

小山田氏をめぐるスキャンダルは、単に彼個人にとってのみならず、不安定さと曖昧さを抱えた複雑な存在としての人間そのものにとっても不当だったと、わたしは考えているのです。その意味で、事情の複雑さを跡づける本書の試みは、単純化の暴力から人間一般を救う努力の一環をなしています。

大部分において小山田氏の学校時代以降の現代日本に密着した考察を行っていながら、

本書が視点の複数性と意見の多様性の圧殺をめぐるフランスの社会学者リュック・ボルタンスキーとドイツ出身の哲学者ハンナ・アーレントの議論を参照することで始まり、第二次大戦終戦直後に獄死した哲学者、三木清の有名な著作『パスカルにおける人間の研究』に焦点を当てることで終わっているのは、あらゆる困難にもかかわらず人間の複雑さを守らなければならないという、本書を根底で支える確信の一般的性格に関わっているのです。

実はこの点でも、先述の古谷田奈月氏の仕事が著者を励ましてくれました。同氏の最新長編『フィールダー』（集英社、２０２２年）は真の傑作ですが、そこで主人公の編集者・橘泰介は、担当する児童福祉専門家・黒岩文子が小児性愛の嫌疑をかけられ（そして問題含みの行動があったのは事実らしい）、同期の週刊誌記者に狙われているのをなんとかしようとして、「一年と三十万字くれ」と叫びます（第四章）。「一年と三十万字だよ。百瀬さん。それより削れば人が死ぬ」「紙幅なんだ。すべては紙幅だ。言葉が全然足りないんだよ。複雑なことを複雑なまま伝えないから自殺や差別がなくならない。人間は、本当は、単純さに耐えられる生き物じゃないんだ」

本書の元になった原稿は、当初は大炎上の直後の２０２１年７月後半、数千字からせいぜい一万字程度の単発のウェブ記事として依頼を受けて準備されたものです。この時点で

インフォデミックの側面は明らかでしたから、わたしとしても早急に記事を公開して世論に訴えたい気持ちがありました。しかし本件の背景を理解し読者に向けて説明するためにはより多くの調査と文字数が必要であることがやがて明らかになり、結局は年末に、10万字を超える原稿としてようやく公開開始にこぎ着けることができたのです。生来の要領の悪さを棚に上げて振り返るなら、著者であるわたしを駆り立てていたのはこの橘と同じ、複雑なことを不当に単純化してはならないという思いだったと言えるかもしれません。

*

本書は、岩波書店がウェブ上のプラットフォーム「note」で展開するメディア「コロナの時代の想像力」に5回にわたり連載された論考、「長い呪いのあとで小山田圭吾と出会いなおす」に基づく著作です（第1・2回：2021年12月28日、第3回：2022年1月14日、第4回：同2月18日、第5回：同2月24日）。

第1章第1節には、元となったnote版第1回の発表時の緊迫した雰囲気が色濃く感じられます。当時の空気感を記録することにも意味があるだろうと思い、活動再開がなされ

た現在の観点から論調を修正することは差し控えました（情報更新の必要なところは〔　〕内で補足しています）。また、本文中、敬称はすべて省略しています。